

各 位

2018年6月25日
株式会社リットーミュージック

『サウンド&レコーディング・マガジン 2018年8月号』に
俳優としても活動する DEAN FUJIOKA が登場
「音楽でこの思いを伝えたい」というヒリヒリした焦燥感がある」 (DEAN)



インプレスグループで音楽関連の出版事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、TVドラマ『モンテ・クリスト伯 —華麗なる復讐—』の主演でも話題を呼んだ DEAN FUJIOKA（ディーン・フジオカ）が表紙の『サウンド&レコーディング・マガジン 2018年8月号』を、2018年6月25日に発売します。

一般的には俳優としてのイメージが強い DENA FUJIOKA ですが、実は音楽クリエイターとしても作品発表やライブ活動を積極的に行っています。彼の主演ドラマ『モンテ・クリスト伯 華麗なる復讐』の主題歌になっている「Echo」も作詞・作曲を自ら手掛け、しかも UK の新しいダンス・ミュージックのジャンル“WAVE”を取り入れた先端のサウンドを提示。同曲のマニアックな制作秘話を中心に、彼の音楽に関する貴重なコメントを数多く掲載しています。

感があるサンプルが見つからなかったんですね。自分でサウンドを作ることも考えたんですが、なかなか興味が取れず……。

——そこからMitsu.Jさんに具体的なイメージを伝えていった?

DEAN まずは自分が聴いていたウェイブのコンプレッションの世界観を感じてもらおうと、お気に入りの曲をドバッと聴いてもらいました。あと、重要なお点として挙げたのは「どうやってラスト部分で音を振れるのか」ということ。「Let it snow」のときもそういう試みをしてはいたんですが、基本的に音が終わった後のミュージック・パートが個人的にはサビというか、一番盛り上がるってところって感覚なんです。あの中間には違つかも思いますが、音が無い部分を頂点に持って行きたいですね。という話をMitsu.Jさんしていました。そこはさすがにわかりましたね。

同じことの繰り返しの中でも飽きないような展開を考えた

——最初のピアノ弾き語り部分からシンセ・サウンドへの流れを作ったのも、パートの盛り上がり部分も意識したためですか?

DEAN どちらかというとその部分は、絶望の瞬間を破壊力のある形で表現しようと思いついて作り直しました。ピアノの弾き語りから聴かせるのが人間の死を暗示したとら、そこから見えて、悪魔になってよみがえるのがウェイブのサウンドが入ってくる。転落するやうなイメージです。チューリップやベルンなどを参照する中で、人の良い部分と悪い部分、光と影というのが人間の歴史にあるなと感じました。その約束するやうなイメージを入れたらいいと思い、ピアノで始まって転落する……生まれ変わる瞬間の変化の大きさを破壊力を追求したいとMitsu.Jさんに伝えました。

——その転落が表現されたウェイブ・サウンドはやはり冷た

さや凄さを感じる音になっています。サウンド作りに関してはMitsu.Jさんどがいり取り取りをしましたか?

DEAN まずはアモを聴いてもらって、1回アレンジしてもらったんです。それを聴かせてもらって、「だしたらこいう音の方が良いんじゃない?」というようにサウンドのチョイスをしていました。芸術的な面で“こうしてください”というのはあまり言っていないで、不気味な感じというイメージをMitsu.Jさんに伝えましたね。強い再渡歌の音だけで成り立たせるやうな……上モノが聴いてなくても世界観がでるやうな土台を作りたい。それから、グライトで使われるやうなちょっと間抜けでかわいさの音の流れたミッドレンジを聴かせたいというも思いましたね。それと、絶対エア・ホーンの音を入れたかったんです。思いっきりウェットにして、聞かしているやうなエア・ホーンの音のラジコンマシンガンの代わりに使う。大サビのブレイク後、パンチンセやビートが返ってくる部分でエア・ホーンの音を聴いて、約束する瞬間を表現しました。

——最終的なサウンドの決断などはMitsu.Jさん?

DEAN はい、僕の意見をうまく取り入れてくれるもキヤチャーですね。リファレンスの曲と全く同じことをやったんだのと同じになってしまっています。こちらの意見を汲みながらプログラミングをしてくれました。Mitsu.Jさんはすごく視野が広くて、冷静に意見を汲み取って具現化してくれて、一緒に制作をしていて安心感がありますね。とても丁寧に音を作ってくれます。アモではループもののビートを聴いていたんですが、音の地盤を食めてしっかり打ち込んでトラックのスタイルを出してくれました。

——ソフト音源などは何を使われていたのですか?

DEAN 僕はアモの音源でXFER RECORDS Serum を使っていました。手っ取り早いから(笑)。Mitsu.JさんはSerumのほか、NATIVE INSTRUMENTS Massiveなども使っていましたね。



▲Liquid Ritual Web サイト (Web: <http://liquidritual.com>)

UK発の新ジャンル“ウェイブ”

ウェイブはイギリス、ロンドンを中心として世界中に広がりを見せている新しいベース・ミュージックのジャンル。同じイギリス出身であるダブステップや、トランプ、グラム、ウェイバーウェイブなどのジャンルから影響を受けており、テンポは100BPM～140BPMほどで、ダークで冷たく、重たい日本のシンセサウンドが特徴だ。その中心人物として中心人物がDJフロアアーティストのKare full。同じウェイブのアーティストであるLTHL、Stehoiとウェイブ専門レーベル“Liquid Ritual”を運営しており、新たなウェイブ作品を積極的にリリースしている。



DEAN FUJIOKA × D.O.I.

最先端を追い続ける2人の音楽観に迫る

「Echo」の制作について、DEANとMitsu.Jに尋ねてもらったがいこから「Echo」のミックスを手掛けた本誌おなじみのエンジニア、D.O.I.氏とDEANの対談をお届けしよう。最新のベースミュージックを取り入れた楽曲を生み出すDEANと、毎年Engineers' Recommendにてカッティングエッジな作品を紹介してくれるD.O.I.氏、2人の持つ音楽観に迫るため、トレンドのサーチ方法から今作のキーワードであるウェイブ、そして現在の音楽界に多大な影響を与えているヒップホップ、ドラップ、R&Bについて、音分に尋ねてもらった。

最近SNSでアーティストをチェック 情報が増えるとはどんな変わってきた(D.O.I.)

—D.O.I.さんが初めてDEANさんの作品に携わったのはいつですか？
D.O.I. 大阪城ホールでのライブを収録したDVD「InterCycle 2016」のミックスが最初です。知り合いの方から「DEANさんって知っていますか？」と連絡が来て、急遽ミックスを担当することになりました。

—そのときにDEANさんの音楽活動を知った？
D.O.I. そうですね。もちろん保護としての派は知っていたのですが、ライブの音源を全部聴いたときにびっくりしました。フューチャーベースやオルタナティブなインディロック的な曲もあり、「こんなに音楽性が面白いのか」と、前に一度、SNSが何かでまたま見かけたんですが、「好きなラッパーは誰か」という質問に対して、DEANさんがMFドームで書えられていた人なんです。めっちゃハマリアーティストだなと(笑)。ヒップホップ好きでも、なかなかMFドームは出てこない。やはり日本というよりは海外の人に近い感覚を持っている人なんだと感じました。ライブの音源を聴いたときにそれを思い出して、ヒップホップだけじゃなく全ジャンルをいろいろと分かって制作されている方なんだと驚きました。

—そのあと1st EP「Permanent Vacation / Unchained Melody」のミックスもD.O.I.さんが担当されていますか？
DEAN 「Circle」はインドネシア、History Melodyは日本とインドネシアで制作していて、全部日本でやるというので「Permanent Vacation / Unchained Melody」が初めてだったんです。だから全く日本の音楽観を持っていくものも分かっていなかったんですが、そんな自分でもD.O.I.さんの名前が出ているところで聞いていた。「Permanent Vacation / Unchained Melody」を一緒に制作したUTA氏が普段からD.O.I.さんと仕事をしていて、自然とミックスをお願いすることになったんです。「やっとD.O.I.さんに会えるな」ってすごくワクワクしていたことを覚えていますね。

—今回の「Echo」はUKの新しい音源ジャンル、ウェイブに距離を置いて作られています。DEANさんはそういった音源のトレンドのように思っていますか？
DEAN SoundCloudやSpotify、Apple Musicが多いですね。ドラマや映画の仕事をしているととにかく移動時間が多いため、その時間を有効に新しいものを探しています。もしくはSpliceなどで音源だけをチェックしておく感じですか？
D.O.I. 好きなアーティストがいれば、その時点でネット検索やSNSで調べたりすることが多くなりました。あとはSp

otifyのプレイリストでチェックすることも最近増えてます。昔はGanja vs BearやHyge Machine、Pigeon & Pinesなどの有名な音楽プロダクションを頼っていて、今御社もなやしていないかもしれないRSSリーダーも使って毎日チェックしていました。そこで目を付けたアーティストを検索すると、また聴きが近いアーティストが見つかって、そこからまた別のアーティストにつながりつつあります。でも、やっぱり情報力でGoogleなどよりもSNSの方が上のようないろいろな情報が集まってくることはほとんど変わらないと思います。結局ブログを更新する人もいなくなりつつあって、残っているところはちょっとビジネスっぽくなっています。「この曲が面白いから、パワとネット上げて紹介する」というのは、SNSに移って来ていますね。

—ウェイブというジャンルはチェックされていますか？
D.O.I. 実はウェイブというジャンルは認識してはいたんですが、後から知ったんです。でもそのときはちょっとビジネスっぽく感じて、「Echo」を聴いたときに「新しい系統だな」と理解できました。いろいろジャンルを一通り聴いてみるんですよ。

DEAN それ分かります。今回、曲を作っていたときは全くウェイブという名前を聞いていなかったんです。作った後に、ウェイブのルーツを引っ張っているKane-fuが聴いてくれて、「これはウェイブだ」と教えてくれたから。「あ、そうなんですね。ではありがたくジャンルをさよならしたい」と思っていたら(笑)。
D.O.I. 何れにしても、昨日の一日と見比べると、5月30日と5月31日の2日間、僕も最初うなりました。音楽や映画といったイメージが「取りやすい」。

D.O.I. ネットが発達してから音楽ジャンルの細分化が加速してきていますよね。その中でも特に新しいジャンルが出てきたりして、それをサブジャンルとして理解していることが多く、例えばEDMと書ってもたくさんあるじゃないですか。メルボルン系とか、「これはメルボルン系だ」と分らないと、そのニュアンスを伝えない。今のエンジニアは、ジャンルをさらに細かくしてこそまで理解する必要があると思います。普段からいろいろ音楽を聴いていると、アーティストにイメージを喚起されても、結局自分には響きにくい状態になってしまう。

—DEANさんが最初に聴いたウェイブ系の楽曲は？
DEAN えっと……こういうときにSoundCloudが便利なんです。全部ライクしてたら後から探せます。

D.O.I. ライクし過ぎて分からないこともありますけど(笑)。
DEAN さかのぼってみると、一番最初に聴いたのはMYS「TKRNL」の「GHOST」ですね。あとはVLMFの「End Of A Dream」、Byumeって作っている曲が結構あったんですよ。

DEAN FUJIOKA の単独インタビューはカラー7P。そして「Echo」のアレンジメントを手掛けたトラック・メイカーMitsu.Jのインタビュー2P、さらに目玉は国内のトップ・エンジニアD.O.I.氏のスタジオにて、DEAN FUJIOKA と D.O.I.氏の初対談も実施。計16Pで「クリエイターとしてのDEAN」を余すところなく伝えます。

CONTENTS

- 総力特集：「パーツ」と「回路」解体新書 ～真空管／トランス／FET／OP アンプ／FPGA／etc...
- インタビュー：DEAN FUJIOKA、アルヴァ・ノト、ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー、ジム・オルーク、チャットモンチー、KIRINJI、他
- PA レポート：椎名林檎@NHK ホール、GARNiDELiA@中野サンプラザ

それぞれ独自の振る舞いで命令をさばく集積回路

CPUの役割

CPU、DSP、FPGAは、いずれもトランジスタ主体の集積回路で、機器内で何らかの命令を処理するために使われます。CPUとDSPは概念的に近いのですが、FPGAは近年生まれたもので、全く違うものです。

まずはCPU。名称はCentral Processing Unit(中央演算装置)の略で、1970年代の前半に誕生し、当時からコンピュータに必ず搭載されていた。初期のCPUとしては、Z80/Z88というのがある。今からすると単純な仕様ですが、「命令を受けて周辺のコンポーネントを動かす」といった基本的な仕組みは今のものと変わりません。用途によってさまざまなタスクもこなす装置なのです。またCPUにはどんな分野の仕事もこなす。オーディオはもちろん、グラフィックの処理などもサポートします。INTEL製のマルチコアCPUなどはクロック周波数(動作スピード)もGHz級と高く、Z80とは比べものにならないほどのマルチタスクに対応します。このクロック周波数が上げられるほど、多くの仕事を並行してこなせるようになるのです。

DSPの役割

マルチコアCPUに対して、DSP(Digital Signal Processor)は音に特化したことを特徴にこなすものです。例えば音響機器の中では、リバーブの処理の重要なエフェクターの駆動に使われています。もちろんCPUにも同じような仕事はできるのですが、音響機器にはコストなどから考えて、コンピュータに入っているような集積CPU

は現実的ではありません。だからと言って、安価なCPUを使用すると処理のスピードが落ちる可能性があるというわけで、コスト高とパフォーマンス差のバランスが良いDSPが採用されるわけです。

次に、ハイエンドなCPUを音響機器に使うことが、専用ソフトとともに運用すれば、恐らく良い音が得られると思います。例えばステレオ音源の再生だけに特化したソフトを開発して、高品質なCPUを備えたハード上で動かすような形ですね。

FPGAの役割

地方FPGAですが、これはField-Programmable Gate Arrayの略称で、「この用途に合わせてこう行動する」といったパターンを事前に構築できる回路。メジャーになったのはここ10年前後という印象で、メリットは開発コストの低さや汎用性の高さです。CPUやDSPは、特定のコンピュータ言語を扱えないと開発できない回路ですが、FPGAはある程度ロジックの分かんない開発でも、自由にイチからプログラミングすることが可能。音響機器においては制音セクションに使われることが多く、例えばリッチネスリソース内のメニュー操作などに活用されています。

代表的なCPU/DSP/FPGA

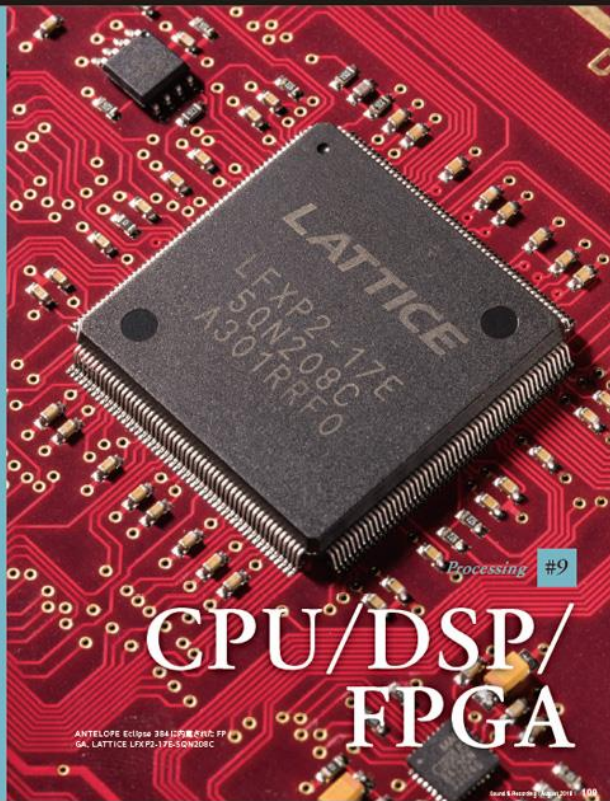
CPUはINTELのものに限らず、DSPはANALOG DEVICES/Shareなどが音響機器においてよく使われています。FPGAについては、ALTERAやLATTICEといったメーカーの製品が有名どころですね。



▶ PACIFIC MICROELECTRONICS HXCDのプルーゲード内蔵デジタルフィルター、PM0108、DSPで構成されている



▶ ANTELOPE Trinity ICにLATTICEのFPGAが搭載されている
●はLXK PXC-TM144C



Processing #9
CPU/DSP/
FPGA

ANTELOPE Eclipse 384に搭載されたFPGA、LATTICE LFXP2-17E-50N208C

#2 Amplification
FET

FET

オーディオアンプのPASS LABSで実験中に撮ったFET。右側は高電圧用の電圧増幅トランジスタ MOS-FET、左側は低電圧用の電圧増幅トランジスタ



半導体の増幅素子トランジスタのバリエーション

IC

FETは、音響の真空管と同じく、入力された音声信号の電圧と出力を増幅するための素子です。真空管は1940年代の商業用増幅素子の主流でしたが、1970年代になると半導体素子(導体と絶縁体の中間にある金属などの物質を使った素子)のトランジスタにその座を譲ります。トランジスタは真空管に比べて低コストで、動作させるための電圧も低く済むので、用途が一気に変わったわけです。やがてトランジスタのバリエーションとして生まれたのが電場効果トランジスタ(FET(Field Effect Transistor))。仕組みや使用されている材料の違いにより、JFET(Junction FET)やMOSFET(Metal Oxide Semiconductor FET)などのバリエーションが生まれ、どのくらい電圧をかけたときにどれだけの電圧が取り出せるかといった「振る舞い」もFETによって異なります。

IC

使いどころとしては、プリアンプやパワーアンプが代表的。これは真空管と同様で、仕組みもまたよく似ています。例えばJFETはドレイン、ソース、ゲートの3つの電極を備え、ゲート電圧をかけることで、ドレインとソース間の電流の量をコントロールするという原理。増幅された電圧は、ソースから取り出すことが可能です。内部のワイヤの厚いなどで電圧の量が違ってきます。それにより電圧増幅率や電力増幅率といったすみ分けがなされます。近年では大電流を流せるUHC MOSFET(Ultra High Current MOSFET)という種類もあり、音響機器の設計者は開発したい機器で流す電流の大きさ、その機器が使用される環境の電圧、増幅率などを考えて最も適切なものを選びます。これは真空管でもトランジスタでも同じです。

このようにアンプ内で活躍しているFETですが、仕組みを利用してスイッチに使われることもあります。ゲート電圧に一定の電圧をかける、ドレインからソースに電流が流れるスイッチがオンになる、という原理ですね。FETでは、スイッチングの間に分断するというバリエーションもありません。何千倍、何万倍とスイッチングしても壊れにくい、つまり長寿命で安定しているんです。

チップ

それではFETの音質とは、どのようなものなのでしょう? 基本的に、増幅率を適切に調整すれば、100kHz以上まで伸びるワイドレンジなサウンドを得ることもできます。また、全周波数ゆびみ率やSN比の大幅な向上も可



▲音響ハウスの増幅用FETの一環、左からFUJ 20N、18F820、J14 J、J型増幅用MOS-FET



▲AUR7音響のFET、2M3219。これは増幅用FET-FETと呼ばれるもので、MOS-FETとは増幅率が異なる

能。つまりFETを採用すると、高品質なアンプを作りやすいわけです。TELEFUNKEなどの真空管を用いて増幅したアンプを越すレベルの性能を出しますが、ゆびみ率やSN比などの数値だけで比較するとFETアンプに分があると思えます。

FETは工場でのオートメーションで大量生産できますが、個体差が大きいという側面もあり、同じ型番のものでも特性にバラつきがあります。なので高品質なアンプを開発するために、ものすごい数のFETを仕入れて、特性のそろったものを選んで採用しているメーカーもあるようです。

■雑誌情報

サウンド&レコーディング・マガジン 2018 年 8 月号

定価：900 円（本体 833 円＋税）

発売：2018 年 6 月 25 日

刊行：リットーミュージック

商品情報ページ <https://www.rittor-music.co.jp/magazine/detail/3118121003/>

【株式会社リットーミュージック】 <https://www.rittor-music.co.jp/>

□所在地：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング □設立：1978 年 4 月 10 日 □
資本金：1 億円 □決算期：3 月 31 日 □従業員数：75 名（2017 年 3 月 31 日現在） □代表取締役：松本大輔 □
事業内容：音楽関連出版事業

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/index.htm>

株式会社インプレスホールディングス(本社：東京都千代田区、代表取締役：唐島夏生、証券コード：東証 1 部 9479)
を株式会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「モバイルサービス」を主要テーマに専門性の高いコンテンツ＋サービスを提供するメディア事業を展開しています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社インプレスホールディングス 広報宣伝担当
Tel: 03-6837-5051 / E-mail: pr@rittor-music.co.jp